

# 「英語教育改善プラン」に基づいた教員の指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～東京都～

○中・高等学校の英語科教員の指導力向上

○外部専門機関と連携し、年間を通じて継続的な指導力向上を目的とした研修の実施

## ・取組内容

- ・年間計7回の通所研修に加え、各受講者が校内で還元研修を14時間以上実施。  
※テーマは、4技能に関わる活動の充実、文法指導の在り方、クラスルームイングリッシュ等

## ・成果

- ・「英語でお互いに話す機会をたくさん提供している。」(平成29年度研修受講者34名対象)

	研修前	研修後
「とてもそう思う」「そう思う」と回答した教員の割合	45%	81.6%

- ・「生徒の英語のスピーキング力の上達しているのがわかる。」(平成29年度研修受講者34名対象)

	研修前	研修後
「とてもそう思う」「そう思う」と回答した教員の割合	25%	63.2%

## ・成果の波及・周知について

- ・上記の成果を今年度本研修の第1回にて受講者及びその管理職に伝達し、研修の意義を周知。

## ・課題解決のための手立て

- ・ねらいを明確にして、通所研修と校内における還元研修を年間を通じてスパイラルに実施することが本人の授業改善に大きく影響を与えることを踏まえ、本研修を継続実施。

# 平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～目黒区立田道小学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

英語によるコミュニケーションに慣れ親しみ、楽しんで取り組もうとする姿勢が見られるが、自分の言葉で伝えたいことを伝え合う力、会話を続ける力に課題がある。これらの課題を解決するため、場面設定を工夫しコミュニケーションに必然性をもたせることで、児童が自分の言葉で伝え合い会話を続ける力を育みたい。

## 具体の取組の内容

- ・年間に7回（1年生～5年生各1回、6年生2回）の研究授業を行い、全教員で参観し協議を行い、外部講師より指導・講評を受け、授業の成果と課題を整理する。
- ・各担任が、授業におけるコミュニケーション活動に必然性がもたせられるよう、場面設定を工夫する。また、自分の言葉で伝えたいことを伝え合ったり、会話を続けたりするためにはどのような場面設定にするかを、授業を行う学年が中心となって研究分科会において検討する。



### 成果①

- ・児童が、その単元で学習したフレーズだけでなく、コミュニケーションを図る目的や場面、状況などを意識して、それまでに学習した言葉やフレーズを使って伝えたいことを伝え合おうとするようになった。
- ・コミュニケーションを行う際、既習表現を使って会話を続けようとする意識が高まった。  
（4月、1月にアンケートを実施した結果より）

### 成果②

- ・外国語の学習に対する意識が変わってきた。  
※保護者の学校評価アンケートより
  - 1年生から身に付けられて良い。
  - 外国語の授業は特色があり、子どもが楽しみにしている。
  - 中学校に入学した際にゼロからのスタートでなくありがたい。
- ※外部講師から見た教員の変容
  - 授業中、分からない言い方をALTに質問する。
  - 授業においてALTとHRTがフィフティ・フィフティの関係である。  
→教員の英語力の向上が授業の質の向上につながっている。

### 今後の課題・方向性

- ・コミュニケーション活動や発表活動において、「話すこと」に対しては、「言いたい」「話したい」「伝えたい」という思いが強く、言葉や言い方を考えて何とかして伝えようとする姿勢が見られたが、友達の話に対して共感したり受け止めたりしながら、聞く姿勢に課題が見られた。
- ・今後は、双方向のやりとりについて、特に、聞く力を高めるためには、聴き手を育てることが大切である。聴き手が、リアクションだけではなく、質問の表現を習得し、既習事項を活用しながらコミュニケーション活動を行える力を育むべく、さらに研究を深めていきたい。

# 平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～三鷹市立第七小学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・必然性、即興性をもって英語を活用した授業を行うことが難しいという課題に対して、ALTの配置方法について、これまでとは異なる工夫をした。
- ・授業を行う教員が英語の指導に慣れていないという課題に対して、ALT派遣会社の研修を活用しながら校内研修を重点化した。

## 具体の取組の内容

### 1. ALT(英語指導助手)集中配置方式の導入【ALT派遣会社・国際基督教大学(ICU)国際ラーニングセンターとの連携】

これまでのTTのやり方を根本的に変え、普段の授業は担任がテキストやデジタル教材を駆使しながら単独で行う。その授業が3～4回続いた後、ALTが5名同時に授業に入り、ALT1名が児童6～7人を担当する。可能な日はICUの留学生もボランティアで参加し、担任単独の授業で学習してきたことを、児童はNS(ネイティブスピーカー)を相手に「実践」する。そこには「ALTや留学生に英語で伝えたい！聞いてみたい！」という「必然性」が生じ、児童は目的をもって主体的に事前の授業にも取り組む。また、集中配置日の英語でのやり取りでは、相手意識をもった「即興性」も養われる。5名のALTや留学生は45分間の授業内でローテーションするので、児童は複数のNSと順番に繰り返し会話をするようになる。さらに友だちとNSとの会話を浴びるように聞き取ることになり、その会話を聞き取る過程で対話的な学びも行える。ALTも従前のTTのときより生き生きと指導に当たっている。外部専門機関との連携により実現したALT集中配置方式は、予算を増やすことなく、ALT本来の役割を現在の条件下で最も生かせる方法であると考えている。

### 2. 校内研究の推進と実践的研修の充実(ALT派遣会社による研修会の設定)

英語による校内研究を行い、授業研究に取り組むとともに、夏季休業日にALT派遣会社のALTトレーナーによる授業研修会を設定した。また、授業観察を外国語活動で行い指導し、校長自ら校内英語研修会講師やALTなしの教師単独型のモデル授業を行い、教員の授業力向上を図った。

## 成果①

1. 1学期と3学期に実施した全校児童対象のアンケート調査の結果から、以下の成果が得られた。

①以前よりNSとの会話量が増えたと回答した児童が70%以上。

②英語を話したり聞いたりすることに自信があると回答した児童が1学期(6月)に比較すると3学期(1月)は80%台から90%台に増加。

2. 英語に苦手意識のある教員が、英語指導の基礎を身に付け、授業の工夫に生かすようになった。「気の重かった英語の授業づくりが楽しくなった。」「ALTに頼っていた授業に自信をもてるようになった。」などの声が寄せられている。

## 成果②

1. 朝の校門での英語の挨拶はすっかり定着した。校内ですれ違う来校者にも英語で挨拶するなど、英語に対する積極的な姿勢が授業内だけでなく、学校生活全般に見られる。

2. 保護者から英語を楽しく学ぶ様子や英語を使う子どもの様子に対して、肯定的な評価を多くもらっている。

3. 校内研修で出される研究授業に対する意見や疑問も、高度なレベルの内容で、スキルをあげたことがわかる。

4. 教員が以前にも増して意欲的に授業改善や授業作りに取り組み、授業力向上を図った。研修にも積極的に参加し、他校教員により影響を与えた。

## 今後の課題・方向性

### 1. ICT機器の一層の整備と活用

教員の単独英語授業に欠かせない映像や音声教材の活用について、教員の機器操作のスキルをあげ、機器自体の使用し易さを改善し、ICT活用を一層推進していく。

### 2. 教員の英語の資格取得

高学年で段階的な評価を行うことから、英語中学校2種免許や英検2級以上の取得の推進を図っていく。

### 3. 英語の日常化の推進

授業だけでなく、朝の挨拶や日常会話の中でも英語を取り入れ、児童にとって英語をより身近なものとする取組を継続する。



ALT集中配置の授業の様子

# 平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～千代田区立九段中等教育学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・新学習指導要領の求める英語教育の実現に向けて、「何ができるようになったか」を実感できる授業の工夫
- ・教員間で情報共有しながら、英語科がチームとなり指導力を向上させるPDCAサイクルの推進

## 具体の取組の内容

- ・ **KUDAN CAN-DOリストに沿った段階的指導**: 中等教育学校6年間で一貫した段階的な指導を行い、生徒各自に学習到達目標を意識させ、その達成に向かわせる取組。今年度は、新学習指導要領で示されているように、これまでの4技能別の項目から、4技能5領域にリストの項目を増やした。
- ・ **共通指導案による授業**: 毎回の授業の学習指導案を作成し、学年で共通した指導を行った。英語教育推進リーダーを含む本校英語科教員の作成した指導案をアーカイブ化し、英語科教員全体がチームとして授業力の向上につなげた。
- ・ **アウトプットの機会の充実**: 授業内において、教科書本文をもとにしたスキットの発表や、ALTとのインタビュー活動、スピーチ発表などを複数回実施することで、生徒が授業で学んだことを、実際に使える場面を系統的に配置し、指導方法について英語科教員で共有した。
- ・ **本校独自の活動**: 朝学習の時間に、ホームルーム教室に隣接大学の外国人留学生在が訪れて、出身国の文化や様々話題について英語でコミュニケーションする「イングリッシュ・シャワー」、本校に勤務する外国人講師が中心になって授業を展開する「イングリッシュ・アクティビティー(EA)」など、学校内にいながらも本物の英語に触れる機会を多く設定し、英語科教員がマネジメントに参画した。
- ・ **年間10回以上の教科独自の研修会**: 毎年テーマを決め、年間評価計画の検討、考査問題の検討、ビデオに録画した授業を見て行う授業研究、大学入試問題の研究など、教科独自に研修会を開催した。そのうち数回は外部にも公開し、大学教授などの講師も招き知見を深めた。

### 成果①

今年度の本校におけるパフォーマンステスト実施状況と、「平成29年度公立中学校・義務教育学校(後期課程)・中等教育学校(前期課程)における英語教育実施状況調査」のパフォーマンステストの状況についての集計結果を比較したところ、年間実施数の全国平均(スピーキング、ライティング、その他含む)を大幅に上回ることができた。

- ・ 第1学年: 37回(4. 38回)
- ・ 第2学年: 32回(4. 89回)
- ・ 第3学年: 34回(5. 38回)

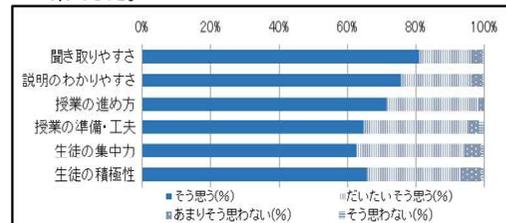
英語を使って何ができるようになったのかを、複数のパフォーマンステストを通じて、生徒自身が実感することができた。

※ 上記の全国平均値は、パフォーマンステスト実施数の合計を、「実施した」と回答した学校数で割って算出した値である。

### 成果②

#### 「保護者による授業評価」での保護者からの回答

- ・間違えてもフォローがあり、テキストの使い方も教えてくれるので親としてはありがたい。「間違えてOK、次にいかそう」という思いが伝わる。発音もすばらしい。
- ・先生方の工夫をこらして考えてくださったゲームに私も参加させて頂き、心から楽しい時間を過ごさせて頂きました。
- ・授業中に覚えたダイアログをその場で発表していたが、皆しっかり暗記して話せていたので驚きました。
- ・生徒同士で問題を出し合うなどお互いに力のつく授業でした。



### 今後の課題・方向性

- ・新学習指導要領の求める英語教育の一層の充実を目指して、「主体的・対話的で深い学び」の観点をどのように組み入れていくかを、教科研修会等を通じて研究していく。
- ・4技能を測る新大学入試制度に対応するための、中学校段階における指導の工夫について検討する。
- ・英語教育推進リーダーの実践を引き続き教科内で共有し、教科指導力の向上に努める。
- ・教員の異動に関わらず、教科として指導力を向上・維持できるように、これまでの実践や指導法を共有するとともに、研修会を通じて人材育成を図る。

# 平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～都立小石川中等教育学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・JET及びALTとのTeam-Teachingの工夫。
- ・論理的、即興的な英語のアウトプットに繋がる言語活動の導入。
- ・対外的な英語に関するコンテストへの参加者及び一般生徒の英語学習への動機付け。

## 具体の取組の内容

1. 本校指導教諭が東京都教職員研修センターの専門性向上研修の講師を引き受け、JET及びALTとのTeam-teachingのモデルレッスンを全都的に発表する。この研修に本校教員も参加して研鑽を積む。
2. JETやALTとのTTの授業を校内でお互いに見学し合い、TTの授業の改善に努める。
3. 新学習指導要領で重視されている、論理的思考、即興的なアウトプット、聞き手を意識した発表の力を磨くために授業内にできるだけたくさんMini-debateやドラマ活動、speech活動を取り入れる。
4. 校外の英語に関するコンテストに積極的に参加し、優勝を目指すだけでなく積極的に参加する姿勢や、さらに上を目指す姿勢を、参加生徒だけでなく、一般生徒にも広がるようにする。

### 成果①

1. 授業で英語劇に取り組んだ生徒達が東京都の英語劇大会で準優勝した。この劇の参加者は校内プレゼンテーション大会で8名がクラス代表となった。
2. 都立中高一貫校のスピーチコンテストで本校代表者が優勝した。
3. 教員は、ほぼ毎週、英語科会を開き情報を交換して授業改善に努めた。
4. 教員が上記の指導教諭のTTの研修会に参加して授業改善に努めその内容を教員同士で共有した。

### 成果②

1. 授業内でmini-debateを実施する学年やクラスが増え、生徒が論理的に議論することが少しずつできるようになった。また有志が校外のdebate contestに参加し優秀な成績を収めた。
2. 高2は3学期に海外修学旅行でシンガポールの学生とdiscussionをする予定だが日常の授業での取り組みが大いに役立っている。

### 今後の課題・方向性

1. 校外のコンテストに入賞した生徒のパフォーマンスを他の生徒に見せる機会がなかった。多くの生徒に英語学習の動機を高める意味でもそういう機会をつくりたい。
2. 外国人講師とのTTを成功させるには英語で授業を進めることが重要な要素であることが判明した。原則としてJETやALTとのTTを特別な時間にせず、いつも通り授業をコミュニケーションの場とする。TTについてはさらに外国人講師、日本人教師、生徒のインタラクションの多い場とする。